

訪中旅行の需要喚起へ新たな拠点 『西遊記』テーマに魅力を訴求

中国江蘇省の連雲港市旅游局は7月23日、東京で連雲港観光促進セミナーを開催しました。「西遊東渡山海連運」をテーマに掲げたセミナーでは、連雲港市が舞台となり日本でも馴染みの深い『西遊記』を切り口に、「歴史のある文化の街」「神秘の西遊の城」「観光にも居住にも適する街」「美食の街」「神聖な街」「高速発展中の活気ある街」という6つのキーワードで、同市の主な観光資源や魅力などを紹介しています。

市内42カ所を数える 国家A級観光地

連雲港市は、上海市から北へ約450キロに位置し、改革開放政策が進められてきた中国

にあつても、特に目覚ましい経済発展を遂げてきていることで知られています。海外からの直接投資も活発に行われて、外国企業と中国企業による合弁会社も数多く設立されており、

連雲港市の港湾は「世界への窓口」として重要な役割を果たしてきています。

一方同市は、中国東部の沿岸地域では珍しく山と海に囲まれた環境に恵まれ、港と市街地の繋がるロケーションに広がるレジャーリゾート地としての側面も持っています。

連雲港市には、江蘇省最大の島である連島、雲台山国家級観光リゾート地や江蘇省唯一

の鳥類自然保護区の前三島もあり、「連雲港」の地は、まさに名山名水の幻想的な仙境として、古くから多くの文人も惹きつけてきました。宗王朝時代の文豪である蘇軾は、「海上の倉梧山は青々と茂り、仙境のように幻想的で、言い伝えでは植物はすべて珍しい仙薬と聞く、妻子と離れることになっても、この地で安住したい」と、連雲港の感想を文書に残しているほどです。

連雲港市の市内には42カ所の国家A級観光地があり、国家A4級観光地として、連島、海上雲台山、孔望山、魚湾、大伊山、二郎文化遺跡公園、東海水晶観光文化エリア、連雲港市革命記念館など10カ所が名前を連ねます。また、孔望山仏教摩崖石刻、藤花落遺跡、阿育王

塔、將軍崖の岩画(岩肌に彫刻された絵)、大伊山新石器時代の石棺陵墓区など、全国重点保護遺産も9カ所を数えています。

知名度高い『西遊記』を マーケティングの中心に

そして、その国家A級観光地の中でも、あまりにも有名と言えるのが国家5A級観光地の花果山です。

「連雲港の『花果山』が、その名を世界的に知られるようになったのは、ひとえに『西遊記』に登場する「孫悟空」によるものであることは言うまでもありません。呉承恩が連雲港の花果山を原型として著した作品と言われる神話小説の『西遊記』の舞台となった場所は、花果山で実際に数多く見出すことができます。

小説では、花果山は孫悟空が生まれた山であり、花果山の頂上にある大きな岩から孫悟空が誕生したことになっているため、連雲港市を訪れる多くの旅行者のほとんどが立ち寄り、人気の高い観光スポットとなっています。

山頂には現在も多くの猿がいる花果山までは、連雲港市の中心から路線バスやタクシーで20分程度しかかからず、帰路は乗り物を使わずに徒歩で巨大な岩巡りをしながら下山する



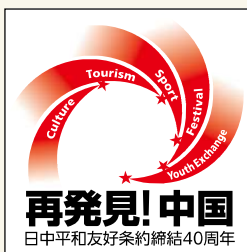
連雲港観光促進セミナーで挨拶する中国駐東京観光代表処の王偉首席代表



セミナーでは、孫悟空が登場する京劇パフォーマンスも披露されました



東京で開催されたセミナー会場の様子



まさに「仙境」の雰囲気も濃厚に漂う雲台山



「連雲港の花果山」は『西遊記』と孫悟空によって世界中に知られており、中国内外から多くの旅行者が訪れる人気の観光スポットとなっています

という楽しみ方もあります。訪中外国人旅行者に中国全土をくまなく旅行してもらったために、中国政府が打ち出している「中国全域旅游」の実現に向けて、日本市場で「三步五眼」という新たなコンセプトを打ち出している中国駐東京観光代表処の王偉首席代表は、「『図を描く』『内容を探す』『出発する』という3つのステップを意味する『三步』のプロセスと、中国国内を各地域の特徴に基づいて『癒し』『三国志』『古文明』『西遊記』『大自然』という5つのテーマを着眼点とする『五眼』で捉えるコンセプトにおいて、漫画やアニメ、テレビドラマ、映画などで繰り返し作品化され、日本でも幅広い年齢層に根強い人気を持つ『西遊記』こそ、今後の日本市場でのテストマーケティングの大きな柱の一つとなり得る」とを、

改めて指摘しています。 「妖怪」テーマに 文化交流の活性化も

また、王首席代表は、日本では、これまで人気の高かったテレビドラマや映画などの作品によって、『西遊記』の冒険活劇ストーリー的な印象が強いことに加え、「物語にそういいう側面が強いことも否定はしないが、中国では、鬼やお化けなどの妖怪が沢山登場する『西遊記』は、古典神鬼小説と呼ばれているほど」と語って、西遊記の妖怪ストーリーとしての重要性を強調。

「そもそも、経典を求めて天竺へ旅を続ける三蔵法師に従う弟子の3人、つまり、孫悟空と猪八戒と沙悟浄も、元をただけば妖怪です。もちろん、三蔵法師の行く手を阻む悪い妖怪に対して、3人の弟子は三蔵法師を守る良い妖怪で、3人の助けがなければ三蔵法師は旅を続けることはできず、三蔵法師を襲う妖怪と戦うエピソードや場面の印象があまりにも強いので、冒険活劇ストーリーとして捉えられるのも無理はありません。しかし、『三步五眼』の着眼点となるテーマとしての『西遊記』では、むしろ、『妖怪ストーリー』としての特性を前面に打ち出していきたいと考えています(王首席代表)

「徐福」の故郷としても 知られる連雲港市

日本がまだ弥生時代の紀元前210年頃、秦の始皇帝による圧政を逃れるため、「不老不死の薬」を求めると欺き、3000人の未婚男女や技術者などを引き連れ、五穀の種を持って中国大陸から船出し、日本の弥生文化の成立に大きな影響を与えたと伝えられる徐福も、連雲港市の出身と言われています。

中国駐東京観光代表処の王偉首席代表は、「日本各地に「徐福伝説」が残されており、徐福をテーマに日中間の地域間交流を活発にするような取り組みも検討したい」と語っており、「『西遊記』を軸とする文化交流とともに、日中間における観光交流の拡大に向けて、連雲港市を拠点の一つとして確立できれば」と意欲を示しています。

日本では、代表作『ゲゲゲの鬼太郎』で知られる漫画家水木しげる氏の故郷である鳥取県境港市が、『鬼太郎』を軸とする妖怪を観光資源化して多くの旅行者を呼び込むことに成功しており、山陰地方の拠点空港でもある地元の米子空港が2010年から「米子鬼太郎空港」の愛称を使いはじめるとして妖怪が立派に市民権を得るほどになっています。



「美食の街」も連雲港市をアピールするキーワードです

らったり、日本の妖怪にフォーカスした訪日旅行商品を開発するなど、妖怪をテーマにアウトバウンド・インバウンドの需要創出や、日中の妖怪文化を軸に両国が協力するイベントを通じて双方方向交流の拡大など、様々な取り組みにも期待したい」と語っています。

中国駐東京観光代表処